

社会的成熟性に対する青年期の 内容別自我同一性尺度からの予測可能性

榆木満生^{*1}

要約：本研究は、将来の人生の適応感を青年期の自我同一性の獲得からどのように予測可能かを調査しようとしたものである。まず、現代社会に必要とされる社会的成熟性とはどのような要因から成り立っているかを分析し、「生活適合性」、「家庭からの自立」「進路適応性」「世代間分離」の4つの因子を見出した。さらにその4つの因子が加齢とともにどのように成熟していくかを調べたところ「生活適合性」だけが、年齢の増加とともに、進歩していくことが分かった。そこでこの生活適合性が、回顧的に調査された青年期に形成される内容別自我同一性によってどの程度予測可能かを重回帰分析法により調べたところ、青年期の社会的同一性、職業的同一性、集団的同一性などの要素をあわせて55.5%に達することが分かった。このことは、青年期の自我同一性の獲得が将来の生活の適応性を大きく影響するものであることを示唆している。

1 自我同一性の研究の変遷

E. H. Erickson が1950年代に「幼児期と社会」(Childhood and Society, 1950)を出版し、その中で、特に青年期には自己概念と他者認知の一致を求めており、「個人は絶えず自己確認を行い、それぞれに主体性を発揮して生きることが大切である」としてこれを自我同一性の概念を発表して以来、多くの研究者が個人の主体性と自己確認を求めてこの研究分野が発展してきた。特に1960年代以降、米国社会が公民権運動に大きなうねりを見せる中で、「自分を見失った」とか「何のために生きているのか分からなくなった」とか言って自己喪失感を持つ若者が「同一性拡散」の現象で説明されるようになり、社会的な一つのキー・ワードとして「自我同一性対同一性拡散」の言葉は定着してきた感がある。

若者時代に見られる自我同一性の概念は、Erickson 以降、多くの研究者が用いるなかで細分化され新たな変貌を遂げてきた。この自我同一性の概念を実証的に研究を進めたのが Marcia, J. E. (1966) である。彼は自我同一性ステイタス (ego-identity status) を提唱し、Erikson のような自我同一性対同一性拡散の2分割ではなく、同一性達成型 (identity achiever)、モラトリアム型 (moratorium)、早期完了型 (foreclosure)、同一性拡散型 (identity diffusion) の4分類を行った。Marcia の自我同

* 1 立正大学

一性ステイタスは、文章完成法としてスタートしたが、やがて半構造化面接法が作られ、青年期の若者に職業観、宗教観、政治観を訊ねることによって大人としての成熟度が判定されることになった。

大人としての成熟することとは、社会環境と個人の相互作用の結果として生じるものである。だから、その時代の中で要請される人間像と深く結びついている。1964年に Marcia がつくった評定尺度を見ると、当時の時代背景を受けて職業的自立、宗教的自立、政治的自立が大人になるための大きな要素であり、個人としての価値観を形成する試金石であったことがよく分かる。続いて、Marcia は1967年に同一性拡散型を分裂的拡散型 (schizoid-diffusion) とプレイボーイ的拡散 (playboy-diffusion) に分類しているし、Jordan (1971) は早期完了型を発達の早期完了型 (developmental foreclosure) と固着的早期完了型 (firm foreclosure) に分類している。Marcia の自我同一性ステイタスは日本にも導入され、質問紙法の形で翻訳されて、大学生への適応を試みたのが、加藤厚 (1983) であった。彼は大学生を、同一性達成型、権威受容型、同一性達成と権威受容の中間型、積極的モラトリアム型、同一性拡散型、同一性拡散と積極的モラトリアムの中間型に分類している。彼の分類によると1983年当時、日本の大学生のうち53%が同一性拡散 積極的モラトリアム型に属するとしている。このようにして自我同一性の研究は、やがて臨床的に用いられる重要な概念になり、各種の疾病の病因論として用いられるようになった。中でもスチューデント・アパシー (学生無気力症) を説明する中心的概念になっていった。

一方米国内では1960年代に始まった黒人差別撤廃運動や1970年代から1980年代のウーマンリブ運動が盛んになるにつれて、民族的同一性や女性アイデンティティとは何かが問われる時代になり自我同一性の概念もさらに細分化され多数の論文が発表されるようになった。

このような研究の中で、自我同一性とは何かあらためて問われるようになり、質問紙法による同一性尺度の研究が、行われるようになった。中でも Rasmussen は Erickson の6つの心理社会的発達段階 (乳児期、幼児前期、幼児後期、学童期、青年期、成人前期) の課題をもとに各段階に12の質問項目をつくり、成人前期までに獲得しなければならない内容を72質問項目にして自我同一性尺度として発表している。しかし、乳児期から学童期までは、自我同一性獲得の準備段階と言うべきであろう。

自我同一性を獲得しようと試みるのは、青年期と成人前期であり、これがその後の自我同一性尺度に大きな影響を与えた。次にその質問項目の一部を紹介する。(鐘幹八郎他編著 1984 アイデンティティ研究の展望1 ナカニシヤ出版 p87 - 90より抜粋)

第5期 (青年期) の項目の例 (自我同一性獲得対同一性拡散)

- 問2 誰も私のことを理解してくれないように思う (×)
- 問22 今と違う顔つき、身体つきであってほしいとはめったに思わない ()
- 問23 もし自分の容姿がもっとよければ、もっとよい人生があくれるだろうに (×)
- (以下省略)

第6期 (成人前期) の項目例 (親密性対孤立)

- 問7 私はとても話しやすい人間のようにだし、自分でもそう思う ()
- 問10 わずらわしい人との交際は、うまく避けていける ()
- 問34 集団内で、私はちゅうちょすることなく、自ら正しいと思うことをはっきり表明できる ()
- (以下省略)

この Rasmussen の自我同一性尺度は、宮下一博（1987）によって日本語版の検討がおこなわれ、質問内容が精選され、簡略に用いることができるようになってきている。しかし、最新の研究では、自我同一性尺度を大きな一つの尺度としてではなく、職業的同一性や性アイデンティティを独立させて別の尺度として用いることが多くなってきている。そのような中で、榆木満生は2003年に青年期に取り組みなければならない自我同一性の尺度を、集団的同一性、個人的同一性、性役割同一性、職業的同一性、社会的同一性の5つの基本的同一性に分類して考え、これを内容別自我同一性尺度として発表している。

2 成果主義を導入した社会における個人の社会的成熟性とは何か

1990年代に入り日本の産業界は大きな社会的価値観の変動を余儀なくされ、それが個人の生き方に大きな影響を与えるようになってきた。つまり、終身雇用制度の崩壊やリストラの実施などの大きな社会的変化の中で、これまで信じられてきた価値観が大きく変化していったのである。グローバリゼーションで世界が一つになる中で、各企業は成果主義を導入し、短期間に最大限の効果を求めて組織替えを行った結果、個人的にいままで信じられていた社会的同一性や職業的同一性は大きく揺らぎ、自殺者が年間に3万人を超える事態までになった。これは個人の意識の中で企業依存型の社会的価値観が通用しなくなり、新しい生き方が求められるようになったことを意味する。中高年の希望退職などが行われた結果、20 - 30代の若者に仕事の比重がかかり過労死が心配されるようになり、職場の健康管理は個人のメンタルヘルス対策までも必要な時代になってきた（川村則之、2002）。逆に言うと、個人の精神保健問題が、実は企業の生産性の低下に大きな影響を与える時代になったのである。このような中で企業においては、快適職場づくりが叫ばれ、個人の生き方も今までと異なった価値観が求められるようになってきた。

さらにもっと大きな変化はIT時代の始まりである。インターネットの普及はいままでの企業組織の中から社長、部長、課長、係長といった縦系列ラインを飛び越えて誰から誰へ発信することも可能になり、中間管理職を必要としなくなり、企業内職種の2極分化が始まっている。また企業における生産拠点の海外移転もおこなわれ、人事異動がかなり大規模にしかも日常的に起こるようになってきている。このような時代背景の中で従来のような長期間の時間をかけて企業が企業内研修で人材を育成することは不可能になってきている。個人はこのような時代を生きるためには、キャリアを自分で形成し、自己の人生の責任は自分で生きる時代が到来している。

このような時代にあって、個人の生きがいや幸福感もまた大きな影響を受けているといわなければならない。そこで今回の研究は、現代社会における社会的な成熟性とは何かを調査し、それが自我同一性とどのように結びついているかを調査していきたい。

II 研究方法

1、予備調査の方法 現在における個人の社会的成熟性尺度の生成

現在、成人を対象にして心理臨床活動を行っている人事課所属のカウンセラー6名に集まってもらいブレイン・ストーミング方式により「現代社会に必要な人間像」について集団討議を行った。この討議内容を録音したテープから抽出した社会的成熟性に関する調査質問内容を31項目に精選し、社会的成熟

性準備尺度として質問紙を作成した。

2、本調査の方法 社会的成熟性尺度及び自我同一性尺度に関する調査研究

(1) 質問調査用紙の作成

予備調査で作成した社会的成熟性準備尺度31項目及び楡木満生（2003）が作成した内容別自我同一性尺度の20項目を質問紙にまとめて作成した。

質問は5件法で行い、 全く当てはまる どちらかといえば当てはまる どちらともいえない
どちらともいえない 全く当てはまらない で回答してもらった。

(2) 調査時期

平成15年10月初旬から11月下旬にかけて実施した。

(3) 調査対象

立正大学心理学部2年生105名及びカウンセリング初心者研修会参加者103名に対してアンケート用紙を配布し、その場で約15分程度の時間をかけて回答してもらい回収した。

III 調査結果

1、調査票の回収状況、及び、年齢、性別の分布

回収は205名であったが、そのうち、回答が と だけの回答をしたものや、調査項目に全部答えず欠陥があったものを除外して、201名回答用紙を統計量の基礎データとした。

その男女別、年齢別構成は次の通りであった。

Table 1 調査対象者の年齢別、性別分布

	男性	女性	小計
19歳から23歳	23名	33名	56名
24歳から29歳	15名	28名	43名
30歳から39歳	14名	22名	36名
40歳から49歳	16名	16名	32名
50歳から64歳	13名	21名	34名
小 計	81名	120名	201名

調査期間が短かったために十分な人数が集まらなかった。特に40代人数をもう少し集めたかったが、各世代区分が30名を超えているので年代別分析を開始した。学部2年生に実施したために19歳が最少年齢であり、これから23歳までは、Ericksonのいう青年後期の自我同一性の完成期に当たる時期であり、これを1つのグループにまとめた。24歳から29歳は成人前期の区分で当てはめ、後は30歳代、40歳代とまとめ、最後は50歳から64歳（60歳代は3名）までをまとめて50歳以上のグループとした。

2、社会的成熟性準備尺度の因子分析結果

この調査のために開発した社会的成熟性準備尺度31項目を学生と社会人の有効回答者201名に対して

Table 2 社会的成熟性の尺度を生成のための因子分析

No.	質問内容	生活 適合性	家庭から の自立	進路 適応性	世代間 分離
q20	自分らしい生き方を知っている	0.706	0.04	- 0.021	0.105
q19	自分の性（男性又は女性）を満足している	0.669	- 0.178	- 0.052	0.107
q30	自分の能力の活かし方を知っている	0.613	- 0.045	- 0.082	- 0.056
q18	どこに住みたいかについてわかっている	0.609	- 0.047	- 0.121	0.177
q25	自分の生き方を絶えず探し続けている	0.542	0.145	0.119	- 0.237
q29	自分に合った仲間や友人に囲まれている	0.459	0.043	0.071	0.062
q 9	自分に合った仕事を知っている	0.408	- 0.057	- 0.133	- 0.197
q16	自分にはどんな仕事に向くか知っている	0.351	0.087	0.197	- 0.239
q27	なぜこの家に生まれたかと悩んだことがある	0.028	0.968	- 0.137	0.105
q 5	生育環境について悩んだことがある	- 0.065	0.955	- 0.066	0.101
q31	自分の気持ちは親より優先している	0.212	0.521	0.069	0.147
q 3	育った家庭とは別の価値観で生きている	- 0.298	0.362	- 0.175	- 0.143
q 4	自分の進路について親と対立したことがある	0.125	0.352	0.243	- 0.208
q 8	できるだけ多くの資格を取りたい	- 0.201	- 0.077	0.737	0.05
q23	種々の資格を取ることが有利だと思っている	- 0.14	- 0.085	0.673	0.089
q12	資格を取るために多少の無理は承知である	0.081	- 0.082	0.534	0.095
q11	よい仕事があったら移りたいと思っている	0.051	- 0.103	0.385	- 0.051
q24	仲間の意見をよく聞く方である	0.17	0.197	0.351	- 0.126
q22	親が薦めた仕事につくことがよいと思う（逆転）	0.102	0.084	0.119	0.927
q 1	気がつく親の意見に左右されている（逆転）	0.058	0.087	0.128	0.877
q13	親が自分に適した仕事を見つけてくれる（逆転）	0.071	0.052	0.022	0.614

調査し、因子分析を行った結果が Table 2 に示されている。

因子抽出法の最初には重みなしの最小 2 乗法を用いた因子のスクリープロットから 4 因子を抽出した。4 因子抽出後の負荷量平方和の累積は 44.0% であった。さらに Kaiser の正規化を伴うプロマックス法を実施したところ 6 回の反復で収束し Table 2 の結果を得た。

この結果によると因子 1 は「自分らしい生き方を知っている」「自分の性（男性、女性）を満足している」「自分の能力の活かし方を知っている」「どこに住みたいかについて知っている」「自分の生き方を絶えず探し続けている」「自分に合った仲間や友人にか囲まれている」「自分に合った仕事を知っている」「自分にはどんな仕事に向くか知っている」の 8 項目であった。どれも日頃の生活に密着した事項であるのでこれを「生活適合性」因子とした。この因子のクロンバッハの係数による信頼性は 0.75 であった。

因子 2 は「なぜこの家に生まれたかと悩んだことがある」「生育環境について悩んだことがある」「自分の気持ちは親より優先している」「育った家庭とは別の価値観で生きている」「自分の進路について親と対立したことがある」の 5 項目であった。いずれも自分の生育環境を振りかえり、その影響から離脱して自分独自の価値観を形成する項目でありこれを「家庭からの自立」因子と名づけた。この因子のクロ

ンバッハの係数による信頼性は0.71であった。

因子3は「できるだけ多くの資格を取りたい」「種々の資格を取ることが有利だと思っている」「資格を取るためには多少の無理は承知である」「よい仕事があったら移りたいと思っている」「仲間の意見をよく聞く方である」の5項目が含まれた。これに対しては、これから生きて行くための進路を模索している姿勢を示すもので「進路適応感」因子と考えられた。この因子のクロンバッハの係数による信頼性は0.70であった。

さらに因子4では「親が薦めた仕事につくのがよいと思う(逆転項目)」「気がつく親の意見に左右されている(逆転項目)」「親が自分に適した仕事を見つけてくれる(逆転項目)」の3項目はいずれも親の影響の受け易さを示している。これらはいずれも逆転項目でありこれからの変化の時代を生きていくためには、もっと主体的な生き方を必要とする時代になることが予想される。これらは3項目であったが家族間の世代間境界を示す重要な指標なので、「世代間分離」因子と命名した。この因子のクロンバッハの係数は0.52であった。

2、社会的成熟性尺度の各因子の年代別変化

社会的成熟性尺度の4因子と各年齢別グループの平均値の変化をグラフにしたのが、Fig. 1である。これによると各尺度で、必ずしも年齢とともに社会的成熟が進んでいくのではないことがよく分かる。中でも「家庭からの自立」は意外に困難であることが分かった。「家庭からの自立」は大学に在籍中よりも社会に出てからの成人前期に大きな葛藤があり、仕事と家庭のバランスに苦しむ時期であることがわかった。大学にいる間は、経済的にも心理的にも親に依存しているが、意識の中ではかなり自立しているつもりである。それが社会に出て親しい同僚や異性に触れてみて、はじめて自分の生育環境を問い直す必要性に迫られるようである。

さらにこれからの社会で生きていくためには、1つの企業に執着するのではなく、「進路適応性」が増加することが求められるが、これは20代の後半をピークにして30代、40代、50代と下降線を辿っていることが分かる。これは40代、50代の人たちは、まだ過去の企業内意識を背負っており、簡単に他の仕事を選択する価値観の転換ができないことを物語っている。

これに対して、生活適合性及び世代間分離は20代から50代に各年代とともに上昇しており、親を乗り越えて個人的な成長を遂げていくには、長い時間をかけていくことが必要であることが分かる。

3、社会的成熟性への自我同一性尺度の予測性

楡木(2003)が開発した内容別自我同一性尺度は、青年期にどの程度自我同一性が達成されているかを測定するものであった。これが今回開発した社会的成熟性をどのように予測しているかは興味あるところであった。しかし、社会的成熟性の下位尺度が必ずしも年齢とともに進むものでないことも、Fig. 1の結果から明確である。

そこで社会的成熟性の下位4因子の中で、年齢とともに進行していく生活適合性因子を例に取り、内容別自我同一性尺度からどの程度予測可能か、重回帰分析を行ってみたのがTable 3である。

生活適合性を従属変数とし、内容別自我同一性尺度の5つの同一性を独立変数として投入してステップワイズ法により重回帰分析を行った。その結果、社会的同一性、職業的同一性、集团的同一性と投入

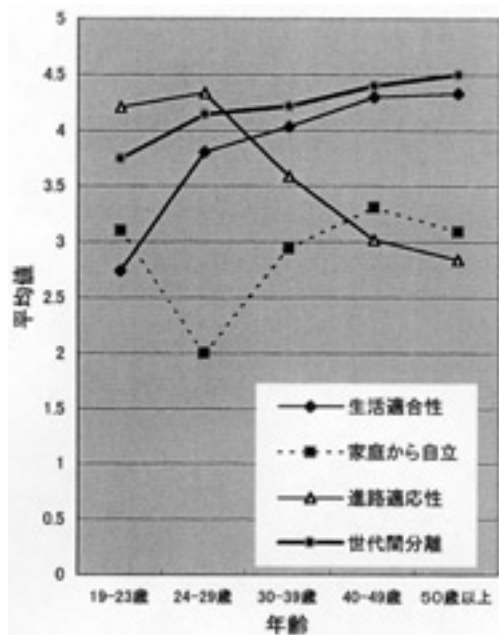


Fig. 1 社会的成熟性の年齢別変化

Table 3 自我同一性尺度から生活適合性への予測

	R	R2乗	調整済みR2乗	推定値の標準誤差
モデル1	0.581a	0.337	0.331	0.511
モデル2	0.732b	0.536	0.527	0.429
モデル3	0.745c	0.555	0.541	0.423

a 予測値：(定数)、社会的
 b 予測値：(定数)、社会的、職業的
 c 予測値：(定数)、社会的、職業的、集团的

	非標準化係数		標準化係数		有意確率
	B	標準誤差	ベータ	t	
(定数)	- 0.446	0.249		- 1.787	0.077
社会的同一性	0.456	0.062	0.514	7.381	0.000
職業的同一性	0.528	0.083	0.437	6.333	0.000
集团的同一性	0.128	0.064	0.139	1.997	0.049

(従属変数：生活適合性)

されて、最終的には調整済みのR2乗値は0.54となった。このようにしたときの社会的同一性の標準化係数(ベータ)は0.514、職業的同一性は0.437、集团的同一性は0.139(個人的同一性及び性別同一性は除外)となった。これは、内容別自我同一性尺度が、生活適合性尺度をかなりよく予測していると結論づけることができる。

IV 考 察

1、変ってきた企業の業績評価基準

現在日本の企業は大きな改革期にあり、今までの終身雇用制度や年功序列制度が見直されてきた結果、新しい人間像が求められるようになった。それはいままでの護送船団方式のような組織依存型の人間から、自己主導型でキャリア開発を行える人間への転換でなければならない。会社はいままでのような長期雇用を前提とした一括採用から、必要なときに必要な人材だけを採用する個別採用の方向へと変化している。これを従業員一人ひとりの観点から見れば、エンプロイアビリティ（雇用可能性）の高い人材を目指して自己研鑽にはげむ時代がやってきたわけである（桐村晋次、2001）。

2、社会的成熟性尺度の意味すること

今回作成した社会的成熟性尺度は、このような次の時代に必要な人物像を模索する試みの1つである。発端は産業界の人事関係でカウンセリングに詳しい人たちのブレイン・ストーミングをきっかけにして求められている人物像の尺度づくりを行ったテープ記録である。それを31項目のアンケート調査を実施し、因子分析で4因子に整理してみた結果、「生活適合性」因子、「家庭からの自立」因子、「進路適応性」因子、「世代間分離」因子が検出された。そしてこれを実際に現代社会で生活している人たちに当てはめてみた結果、年齢とともに成熟していく因子は「生活適合性」尺度であることが分かってきた。他の「家庭からの自立」因子は、20歳代で低下する傾向があり、本当の自立はその後になることが分かってきた。また、進路適応性因子は、成熟性とは逆に年齢とともに低落傾向にある。これは21世紀初頭の横断的統計調査であり、今の20代の若者が40歳や50歳になったときはどうか分からないが、現在の40代、50代の年齢層は過去の価値観をまだ捨てきれないでいる実態が見えてくる。また、「世代間分離」因子は3項目と少なく、信頼性に問題がある結果となった。

3、自我同一性尺度から社会的成熟性への予測性

このように見ていくと、時代に左右されない社会的成熟度とは、現在のところ「生活適合性」因子であることが分かってきた。そこでこの尺度を内容別自我同一性尺度からの予測性を調べたところ、社会的同一性、職業的同一性、集団的同一性を組み合わせた重回帰分析で54%の説明が可能であることが分かってきた。

この結果は、成人期のライフプロセスが個人のアイデンティティ形成と密接に結びついているとしたLevinson (1978) の面接調査の結果とも一致するものである。さらに、この研究はさらに多くの追試が行われており、青年期に自我同一性を達成したものは、その後の中年期の人生において人生の目的感、権威主義の否定、ローカス・オブ・コントロール (locus of control) などとも結びついていて安定した人格像を形成する結果になることは多くの研究でも実証されている。

4、この後の研究方向

今回の社会的成熟性尺度は、青年期の自我同一性の獲得状況から、将来の中年期生活の精神的健康状態を予測するものである。今回の研究は産業界の人事課所属カウンセラーのブレイン・ストーミングか

ら始まったために質問項目が職業観や社会観に偏っていることが考えられる。実際「家庭的な自立」や「世代間分離」はまだ安定した結果が得られておらず、さらに質問項目を多くしてさらに大きな尺度にしていきたいと思っている。この研究はまだはじまったばかりであり、さらに多くの要因を組み合わせることに、さらに多面的な中年期の性格を予測する研究へと発展していくであろう。この方面はさらに大きな展開が期待されるところである。

V 終わりに

時代の変革期にあって、個人の生き方に悩まないものはいないかもしれない。しかも、いつの時代にあっても青年期を過ごしている若者は、どんな人格形成をしたら、将来よりよい人生がおくれるのであろうかと考えている。若い時代にどんな人格形成をしたら、よりよい中年期を過ごすことができ、さらに幸せな人生をおくれるのかと考えないものはいないに違いない。

今回の研究は、社会的成熟性尺度とは何かを考えることによってその一端を考えてみた次第である。この研究はまだ緒についてばかりであり、さらに青年期に何を達成することがその後の人生をより安定して生きられるかを検討していきたいと考えている。

引用文献

- Erikson E. H. 1950 (Revised 1963) *Childhood and Society*, W. W. Norton & Company, Inc. 仁科弥生訳 1977 幼児期と社会、みすず書房
- Marcia J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status, *J. of Personality & Society Psychology*, 3, 551-558
- Marcia J. E. 1967 Relationship to change in self-esteem, general maladjustment, and authoritarianism, *J. of Personality*, 35, 119-133
- Rasmussen, J. E. 1964 The relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Report*, 15, 815-825
- 鐘幹八郎他編著 1984 アイデンティティ研究の展望1 ナカニシヤ出版 p87-90
- 加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造、*教育心理学研究*、31、292-302
- 宮下一博 1987 Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討 *教育心理学研究* 35、253-258
- 榆木満生 2003 内容別自我同一性尺度についての研究 立正大学文学部論叢第117号 1-13
- 川村則之 2002 産業人メンタルヘルス白書、社会経済生産性本部、18-30
- 桐村晋次 2001 日本におけるキャリア開発と産業カウンセリング、*産業カウンセリング研究* 4、(1・2) 33-40
- Levinson, D. J. 1978 *The season of a man's life*. New York: Alfred A. Knopf